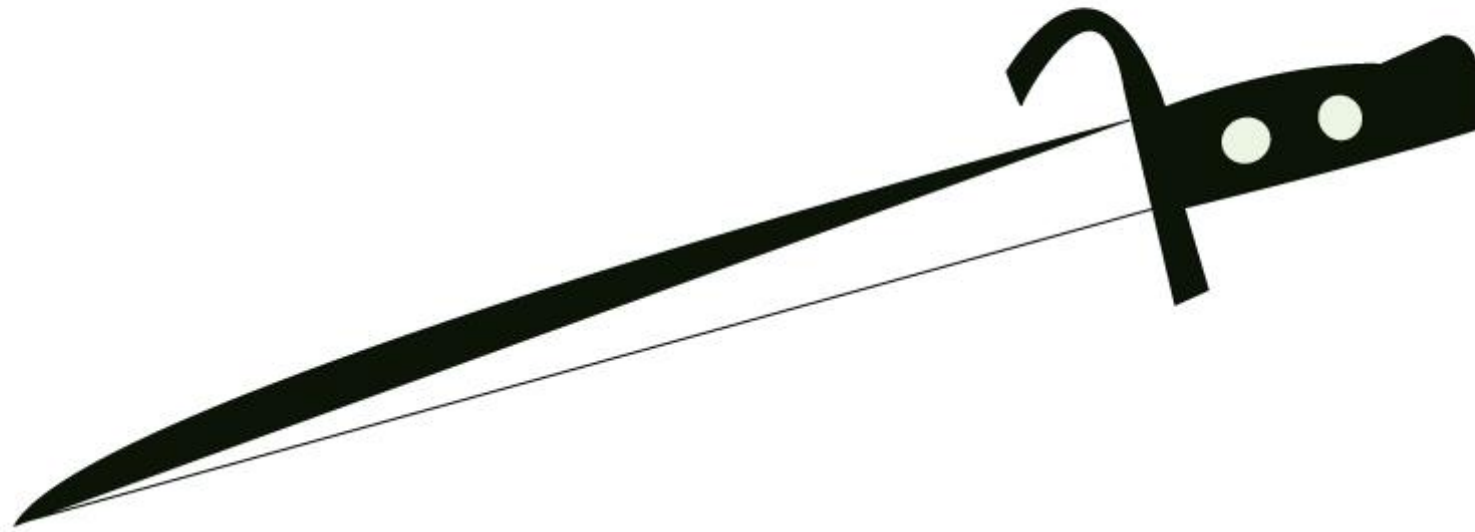




赤い影法師

К р а с н ы й

С и л у э т



僕はドミトリーが大嫌いだ。

子供のころから村で僕をいじめていた。あまつさえ、平民でありながら士官学校を出て一人前の男となったつもりで僕を皆の前でからかった。ドミトリーにとつて僕はいまだにトロスリーヴィイ(弱虫)アレクセイなのだったのだろう。そこまでは別に耐えられた。

問題はあいつがその上に彼女の前で僕を殴ったことだろう。仮にも侯爵が聯隊所持者の聯隊の将校に暴力を振るつたのだ。その場でシヤシユカ(龍騎兵刀)で切り捨てても良かった。いやそうすべきだった。(実際士官学校での鉄拳制裁に比べれば痛くも痒くもなかった)だができなかった。こんな男でも守るべき民の一人、軍人の暴力はただ、祖国の敵、神と皇帝陛下に背く者のみに向けられるもの、という教えがそうさせなかった。

いや、言い訳だろう。やはりあの時僕は意気地がなかった。それだけだ。ゾーヤは、彼女は、そのときには、僕の在り方は正しいと言ってくれた。それだけが慰めだった。

ドミトリーはその後すぐ窃盗で逮捕された。噂ではヴォール・フ・ザコーネ(掟を守る泥棒・犯罪者組織のこと)と十代前半から付き合いがあったともいわれた。

ドミトリーが刑務所に入った話を風の噂に聞いたところ、将校として順風満帆だった僕は特に気にも留めなかった。子供にも恵まれ、ゾーヤとの新婚生活が順調だったこともその理由の一つだ。

革命が全てを変えた。

皇帝陛下が退位し臨時政府ができたことを僕は東部戦線で聞いた。

二年前の屈辱的な大撤退、前の年のブルシイロフ將軍の大攻勢の戦略的敗北と劣勢がつづき、やつと戦線が膠着した、というよりロシア側に攻勢能力がなくなりニメヤスキイ(ドイツ人)たちの興味が西部戦線にうつった1917年2月のことだ。

壊滅的打撃をうけ、武器弾薬人員の補充など夢にも思えない状況下で、ぼんやりとウオトカをあたりながら聞いたその知らせに、僕は怒りを覚えた。だが、臨時政府についた上官に意見する勇氣はなかった。將軍たちは余りにも疲弊した軍の現状から皇帝ではなく臨時政府を支持した。

状況はめまぐるしく変わった。

10月に臨時政府がボルシェビキの人民評議会(ソヴィエト)に取って変わられ、僕の軍団もその指揮下に横滑りしたのだが、翌1918年2月には、ほとんど回復していない状態でその機に攻勢をかけてきたニメヤスキイの大攻勢からひたすら敗走するはめになった。

後で聞いた話だが、初めはニメヤスキイと講和するつもりだったらしいが、ウクライイナの領有権で決裂した結果らしい。

この敗北の後ボルシェビキはニメヤスキイと講和した。

時系列は前後するが、この大攻勢に押され、前線に近づきすぎたペテログラードは放棄された。

僕の所属する部隊はボルシェビキを支持したため、僕は労農赤軍の一員となり新たな首都モスクワの警護を命令さらえた。僕はと言えば、家族のために、と命令に唯々諾々を従っていた。

そのころ反ボルシェビキを掲げた勢力はいくつかあったが、最も有力だったものは極東のコルチャーク提督だったが、首都近くではフィンランディア（フィンランド）から迫るユードニチ將軍だった。その軍内の独立を望むフィンスキたちのユードニチへの反発につけ込み、攻勢を頓挫させることにボルシェビキは成功した。しかし、今度は数世紀ぶりに独立したポルスキ（ポーランド）との戦争が始まった。

次はどこに投入されるのか、などのんきに僕は上官や同僚たちと軍務に追われていた。

甘かった。

ボルシェビキは、まだ祖国の内側を疑っていた。

僕は上官や同僚とともに反革命派のシンパとみなされ、唐突に拘束され処刑を待つ身となった。

しかし、僕は処刑されなかった。それどころか理由もあいまいに釈放された。

そのまま処刑されればよかったかもしれない。

あったのは、自分だけ助かったと言う凄まじい罪悪感のみだった。僕の上官も同僚も、今なお反逆者の汚名が、その建てられしなかつた墓標に刻まれている。彼らが祖国に忠実な良き軍人達だったと知っている者は、僕しかいなくなつた。恥ずべきことは、今の僕が感じることは、その罪悪感すら薄れかけていることへの罪悪感だ。

僕に手を差し伸べたのはドミトリーだった。ドミトリーは獄中で革命家のシンパになり、党员としてそれなりの地位にいたのだ。

ゾーヤには会うことはできなかった。ただ離婚を告げる事務的な手紙が届いていた。

僕の助命のためにドミトリーに嘆願したようだ。その代償は口に出したくない。後は男女の世界で起こる弱肉強食である。ゾーヤもゾーヤともうけた娘たちも以来はドミトリーの庇護下にあるのである。僕はといえば処刑こそされなかったが収容所送りとなった。

次にゾーヤを見たのは収容所に向かう囚人列車を党幹部たちが革命の正当性を民衆に演説し罵倒を込めて送り出した時である。

忘れもしない1920年のロジユディステイヴォ（クリスマス）僕は多くの囚人たちとともに列車に積み込まれた。

壇上に居並ぶ党员夫妻たちのうちの一组、ドミトリーとその腕に抱かれたゾーヤと目があった気がした。彼女たちは僕を嘲笑しているようにみえた。

きつと思い過ぎしなのだろう。そもそも何両も連なった囚人列車の中で僕を探しあてることができないはずがない。だがそう思おうとしてもその後の地獄のそのものの収容所生活では無駄だった。

かつては高貴であったり、社会的に認められていた人々が極寒の絶東で次々に息絶え、僕自身も全身凍傷に侵され両手足の指の本数は半分になった。そんな悲哀と苦痛にまみれた生活の中で、最後に見たゾーヤの表情はどうしようもなく僕を苛んだ。その苦痛は一人だけかろうじて生き残ったことへの罪悪感よりもさらに大きかった。例え僕がどんなことになっても、僕の心はゾーヤに帰ることができるといふ確信が打ち砕かれたからだ。

それは、復讐を心に決めて生きる糧とするような男らしいものではなかった。ただただ、自分の人生の選択を嘆き、悲哀にまみれ、それでいて自らこの恥辱を終わらせることもできず、また天も僕を殺してはくれない日々<sup>に</sup>凍り付いて滴らぬ涙をとめどなく流すという、どうしようもなく女々しいものだった。

収容所の寢室の壁に日にちを刻むことをやめてから幾月が過ぎたころだろう。出所の通告があった。

収容されて二年以上がたっていた。そのころコムニシテイスカヤ・パルティア（共産党）を名乗り始めたボルシェビキは、敗北こそしなかったが、ポルスキイとの戦争に失敗し、革命を周囲の帝国主義諸国（要は帝政時代からの仮想敵国をそう呼んでいるだけだ）から守るため、より強固な軍事力を持つことが決定したらしい。そのために特に軍事、重工業の運用法を知るものと、技術開発に欠かせない物理学や数学などの科学的知識のあるものが優先的に、革命とその理念、及びそれを実践する党への忠誠を条件に収容所からその専門分野に移されるらしい。

ボグ（神）やユステイツア（正義）について考えるにはあまりにもすり減っていた僕らの精神は機械的に忠誠を誓い書面に署名した。

そのまま絶東の極東軍で歩兵の育成を担当させられた。

僕の精神は何処までも主体性がないらしい。一時は怒りと恐れしか感じなかった赤軍に編入されたのにもかかわらず、僕は自分が育成を任された部隊に、そして認めたくないが赤軍という組織に、自分の兵たちが一人前になってゆくにつれて愛着を感じ始めていた。少なくとも彼ら兵士は祖国を守る軍人なのだ、と思うようになったのだ。

階級は少尉に降格され、小隊指揮を任されただけだったが、待遇は悪くなかった。シャシユカは腰に提げないが、将校は一樣にナガン拳銃を下げていた。帝政時代そのままだった収容される前より合理的だ。

だがそのわずかな上向きの気分もすぐに冷めた。

ドミトリーがコミッサラ・ポリティカ（政治委員）として僕の部隊の所属する狙撃聯隊の

別部隊に配属されていたのだ。ご丁寧に家族を、つまり自分の妻としてゾーヤを、子供として僕の娘たちを連れてだ。

また、耐え難い苦痛に襲われた。そこにあったのはただただ自分の運命への冷笑だった。

大規模な戦闘はなく、僕は赤軍将校として大過なく出世し、気が付けば革命から二十年以上たった。

しかし収容所を出て以来十五年ドミトリイは、配属された部隊こそ違ったが必ず僕の部隊と同じ上級部隊に所属する部隊の政治委員としてほとんど同じ階級で常にそばにいた。

その十五年間ドミトリイともゾーヤとも言葉を交わすことはなかった。だが、上級部隊を同じくするということは、同じ駐屯地近くに住んでいるのだ。いやでも目に入る。

腕を組み楽し気に話すドミトリイとゾーヤ。かつて僕に向けてくれた笑みと変わらぬか、それ以上の朗らかな笑みがドミトリイに向けられていた。子供たちもドミトリイを父親として受け入れているようだ。

彼ら家族から僕に接触してくることはなかった。僕も彼らに対し何かしようと思う気がなかった。

僕は彼らに顔を合わすことの無いよう、できるだけ早く登庁し、できるだけ遅くまで仕事をした。加えて、自分のもつ全能力を軍務に傾けることで、ドミトリイとゾーヤと子供たちのことを思考に上らせることの無いようにした。

十五年という歳月は僕を見かけ上筋金入りの共産主義者にするには十分な時間だったらしい。赤軍少佐として極東軍のモンゴルリヤに駐留する第57特別軍団麾下師団の第142車載狙撃部隊の隊長を任された。

歩砲戦空協同縦深突撃理論なるトハチエフスキイ元帥の論文への僕のコラムが極東軍の機関紙に採用されるという機会にも恵まれ、順調に赤軍内での立場を固めていた。

軍務それ自体はやりがいのある仕事なのだ。僕はたとえ政体が変わって、欺瞞と虚飾にまみれた国になったとしても軍人として祖国につくしたいのだ。

だが同時にこの歳月は僕の人生に背後霊のごとく付きまとうドミトリイとゾーヤへの暗い感情を澱のごとく蓄積させるにもだ。それなりの地位にあったのにも関わらず若い妻を娶る気にならなかったのもそのためだ。

その感情はドミトリイが僕の聯隊の聯隊政治委員として配属されたとき決定的になった。

もう人生の折り返しに来たというのに、毎日ドミトリイと顔を合わせること、心の奥底にしまい込んだ暗い感情はそれなりに澄んだ泉の底の泥をかき混ぜて濁らせるかのごとく、僕を蝕んだ。

理屈ではこの男は僕の命の恩人かもしれない。だがその恩義もたまたま僕が極寒のシベ

リアの収容所で生き延びたからだ。このような感情を憎悪というのだろうか。

トハチエフスキ元帥を始めとし、下は下士官兵にいたるまで赤軍内で反革命分子が次々と告発されては処刑されていたのもそのころだった。反革命分子とされたのは、党員軍人である政治委員やあくまで末端でしかない兵卒を除くと、ほぼ皆、帝政時代のからの専門家たちが主だった。そろそろ用済みになったのだろうか。

祖国の西でも東でも帝国主義者たちの活動が活発化していたが、それ以上に党中央は赤軍内部の粛清に御執心らしい。

僕もリストに載るだろうか。内戦のころ一度はリストに乗った身だ。僕よりも優秀な者たちが次々と処刑されている。ドミトリーへの憎悪が日増しに大きくなるというのに、生来の小心から、次は自分か、と見知った人間の名を“反革命分子”“帝国主義列強の内通者”として軍政治局の機関紙で見るとおびえていた。

僕は何におびえているのか、ただ自分が殺されてしまうことにおびえているのではあるまい。正直になれ、そうだドミトリーに、そして僕を見捨てたゾーヤに復讐することができなくなるのが嫌なのだ。

決して意識には上らせないようにしていた感情。おそらくは愛しいゾーヤのことを考えて、そうしてきた感情。

ドミトリーとゾーヤを殺したい、できるだけ苦しめ、許しを請わせてから殺したい。

自分の地位と命が中央の鼻息で簡単に掻き消えるともし火に過ぎないと自覚すればするほど、その感情は濃厚になった。

結局僕はマリクア・コントラエヴオリューツェア（反革命分子）のレットテルを貼られることはなかった。

このソヴィエト・ロシアという魔境で僕のような凡人が生き残るとはどういうことなのだろう。

僕は自身が抱いた疑問に真摯に答えるべきだったかもしれない。

第57特別軍団軍団司令部からの出頭命令があったのは、モンゴルリヤ（モンゴル）とマシジュウルリヤ（満州）の境界でイヤポウニヤ（日本）の帝国主義者の軍隊が本格的に蠢動し始めた1939年の1月であった。

軍団司令部への出頭ということとは、早晚予測されるモンゴルリヤ・マンジュウルリヤ国境での軍事衝突に關することだろう。そう高を括っていた。既に昨年にはオジュウラ・ハサン（ハサン湖・張鼓峰事件のこと）にて衝突がおきていたのだ。通常、動員開始には正式命令で動員される各師団を経て上級司令部から命令が下るものだが、単なる訓示ということだった。師団を飛び越えての命令には何か秘匿性の高い作戦を同志軍司令官はお考えなのだろう、あるいは師団を再編し僕の聯隊は軍団司令部直属になるのかもしれない、などと勝

手に思い込んでいた。何故僕はこれほど小心のくせに、人生の、ニコニコ、と言う時にはいつもぼんやりとしているのだろうか。

期待は裏切られた。

司令官執務室に入ってみると、向かい合う形の二人掛けソファ二つに座った三人の男が僕を見た。

コマンディア・コルポスウア（軍団司令官）、コルポスウア・ポリトラボニク（軍団政治委員）ここまではいい。もう一人いた。

一見歩兵にも見える制服を着た男の腕章には防諜の象徴たる盾と諜報の象徴としての剣があしらわれている。

ナロウディニ・コムスウリア・ブノットリニイ・ディオ（内務人民委員）。通称 NKVD だ。

「これは。」

僕は言葉に詰まった。即座に理解した。ああついに自分の番が来たか。己の陽と陰の二つの欲望。軍人として祖国に尽くしたいという意志も、憎悪する者を殺したいという妄執もいずれもはたされることなく、僕は無様に死ぬのか。

「同志ヴォルコフ少佐、なにを突っ立っている。早く掛けたまえ。」

軍団司令官が私にソファを勧めた。僕が座ると入れ替わるように軍団司令官は立ち上がり、窓に向かい僕たちに背をむけ言った。ヴォルコフとは赤軍での僕の名前だ。

正確にはヴォルコフ (Volkov) ではなくヴォルコフア (Volkova) なのだが、どこかで a がぬけたのだろう。十五年間修正しなかった自分の姓誤りなど今はどうでもよいはずなのだが、動揺で思考が現実逃避しているらしい。

「同志少佐、君は革命とその前衛たる党への裏切り者にはどう報いるべきと思うかね。」

「同志軍団司令官。自分は」

言葉はさえぎられた。

「同志軍団司令官、裏切り者は彼ではありません。」

NKVD の男だった。目の前に座るその男の目は爬虫類を思わせた。彼は軍団司令官が言葉を継ぐ前に続けた。

「同志軍団政治委員、同志少佐に質問を。」

明らかに上位者に対する発言であるのにもかかわらず、有無を言わせぬ様子だった。今この部屋でもっとも権力を持つものは、辺境の軍人ではなく、首都の政治中枢に直接通じているこの男なのだ。軍団政治委員はそのことをよく理解しているのか、促されるまま僕に声をかけた。

「同志少佐、プロホロフ聯隊政治委員とは浅からぬ仲だな。」

全身の血が凍結して逆流する思いがした。プロホロフとはドミトリーの姓だ。軍人として上位者に質問されれば答えねばならない。だが喉が閉まり切ったように、僕は声を出せなか

った。

軍団政治委員はよく見ると少し青ざめた顔だった。質問を、と言われたのにも関わらず、彼はそれ以上何も言いださなかった。

「同志少佐とプロホロフ聯隊政治委員はたしか同郷でしたね。かたや極東軍気鋭の将校、かたや活動当初から革命に貢献した黨員、まさに我らの革命を象徴するかのような二人です。」やわらかい笑みを口元のみにかべ、相変わらず爬虫類のごとき目つきでNKVDの男は再び口を開いた。この男は僕とドミトリーの間のゾーヤに関することも当然知っているのだろう。

「故に残念です。」

彼の隣の軍団政治委員は目を伏せていた。

「彼には金で革命を、イヤポンスキイ（日本人）に、帝国主義者どもに売り渡した疑いが掛けられています。」

男は一旦言葉を切った。こちらを実験対象でも観察するかのようにつめている。

「何か思い当たることはありませんか。タバリシユイ・マーヨイルア（同志少佐）」

「疑いですか。」

「現在モンゴルリヤとマンジュウリヤ国境に帝国主義者の軍隊とその傀儡の軍隊が野心を燃やしています。共産主義の同志として、わが赤軍はモンゴルリヤを助け、これを撃退しなければなりません。」

男は残りの二人も観察対象としたようだ。軍団司令官の背を面白そうに眺め、隣の彼に目を合わせようとしてもしない軍団政治委員の顔を楽しし気に覗き込んだ。

十分実験を堪能したのか、また彼は僕を見た。

「しかし、悲しむべきことに、わが国には革命の理想を目先の小金で売り渡そうとする裏切り者が帝国主義者どもの手によって、深く根を張っていたのです。先日オジュウラ・ハサンでの衝突があったところです。その際総司令官ブリュヘルは意図的に軍の指揮を誤り、赤軍兵士に多大な犠牲を強いました。さらに恥ずべきことに、それを未然に防ぐべき地位にいた極東内務人民委員部長たるリュシコフはあろうことか敵の庇護下に逃れました。」

「私にはプロホロフ聯隊政治委員から裏切り物の兆候を見出すことは出来ませんでした。」自分でも思いもしない言葉が口をついて出た。なぜ僕はドミトリーをかばうのだろう。いやかばってなどいない。ただ戸惑って正直に告げているだけだ。

「同志少佐、情けは時に悪徳です。」

男は立ち合がり、僕の肩に手を置き言った。

「いづれにせよ、私は伝えるべきことは伝えました。われわれ中央内務人民委員が反革命分子を告発するということは、十分なる証拠なくには決してありえないのです。もし疑いが疑いですまなくなつたとき、プロホロフ聯隊政治委員の家族も、友人も、仕事をともにしていた者も、当然スパイ隠匿の嫌疑がかかります。それをお忘れなく。」

そう告げて上位者達への敬礼もなくNKVDの男は部屋から去った。



沈黙が部屋を支配した。司令部施設の正面玄関から高級車のエンジン音が去って行く。まるであの男がこの建物去ることを完全に確認してからでないかと口を開くことが出来なかったとも言うように、軍団司令官はやっと沈黙を破った。

「同志軍団政治委員、一つ質問したい。もし政治委員が反革命分子と明確になった場合。」  
「その場合、当然その時点で政治委員ではなくなります。反革命分子を処理することは、いかなる共産党規則の罰則及び赤軍刑法の罰則にも該当しません。」

相変わらず青ざめた顔の軍団政治委員は腿に両腕をかけ、うつむいて答えた。

「そうか。同志少佐、イポンスキイとの衝突が本格的に始まる前にわが軍団はその浄化にとめたい。だが反革命分子は狡猾だ。けつして尻尾を見せないかもしれない。せめて衝突が完全に終結する前に軍団の正常化につとめることが、反革命分子に決定的な裏切りをさせない手段と本職は考える。」

どうやら僕は予測される次なるイヤポンスキイとの軍事衝突のさなかにドミトリイを殺さねばならないらしい。あれほど憎悪したはずの男なのに、僕はいきなりのことへの驚きと、生来の意気地のなさから、最後の抵抗をこころみた。

「同志軍団司令官、質問があります。これは私への命令でしょうか。」

「そうだ、正式な命令だ。ただし秘匿すべき事象のため、文書なしの口頭命令だ。」  
軍団司令官はいまだに窓に向いたままだ。その表情は分からない。

「君の任務はプロホロフ聯隊政治委員がイヤポンスキイの帝国主義者とながっていると少しでも疑われた場合、いや、革命に反逆する者と判断した場合、適切に処理することだ。」

「同志軍団政治委員、党員たる政治委員に問題があった場合、党規にのっとり処分がなされることが適切と考えますが。」

こんな賢しい質問をする者はこの国で長生きできない。赤軍に忠誠を誓って以来、骨身に試みて弁えていたことだ。

やはり、まるでこれでは僕がドミトリイをかばっているようではないか。いや、やはり僕はゾーヤを愛しているのか。それとも娘たちをかばっているのか。この国は女子供として反逆者とされた者には容赦しない。

反革命分子？裏切り者？今この国でまともに生活できているもので、裏切り者でないものなどいるのか。神を裏切り、祖国を裏切り、自らの信念、信義を叩き売り、誰かの場所を奪い取った者しかいないではないか。あの NKVD の男も、この軍団司令官も、軍団政治委員も、ドミトリイもゾーヤも、そしてこの僕自身も。

ストーブを充分炊いた部屋であるというのに、軍団政治員の青ざめた顔は唇まで血の気が引いていた。

「同志少佐、君の言い分はもつともだ。しかしここは絶東の帝国主義者どもへ対する最前線だ。くわえて宣戦布告こそないが、今は実質戦時だ。忠良なる赤軍兵士たちに動揺を与えることはできない。君に任せるしかないのだ。」

さすが口先だけで出世が決まる黨員軍人だ。いかにももつともらしいことを言わせれば並ぶものは無い。

これ以上質問しても無駄だろう。この男のうまい言い回しの残弾が枯渇する前に、僕の赤軍将校としての命運が尽きる。

さきほどまでいた NKVD、軍団首脳、あるいは極東軍上層部、党極東支部、考えたくもないが中央、いったい何処の誰にどのような思惑があるのか。このうちの誰が彼を殺すことを決定したのか。いずれも僕は知りえない。

ただわかったことは、僕はドミトリーを殺す大義名分を得たということだ。愛しく憎いゾーヤも、血を分けた娘たちも、そのついでに收容所おくりにもなるだろう。

5月13日イヤポンスキイの傀儡のマンジュウルスキイがモンゴルリヤ国境を侵犯してきた。これに対し我が第57特別軍団に出動命令が出た。

国境に進出する戦力として僕の聯隊にも動員命令が下ったため、聯隊司令部で聯隊参謀と政治委員で移動計画の立案と現在の戦況について確認を行った。

イヤポンスキイはまず航空機によって上空の優勢を保とうとしているらしい。敵情に関する報告の最後に最も都合の悪い報告が来た。帝政時代からこの国の、わが祖国の軍人の悪癖だ。いや組織に生きる人間普通の生態というべきか。

「わが空軍の航空機はイヤポンスキイの戦闘機に次々と落とされているようですね。」

元ゴロツキとは思えぬ丁寧な話し方で、ドミトリーがその報告に付け加えた。肅清の嵐が吹き荒れているのに、いやお前ももうすぐその犠牲者の一人となるのに、なんとも物怖じせぬ言い方だ。中央の機嫌をそねた高級指揮官が、良くて更迭、悪ければ左遷という名の処刑の順番待ちの椅子に座っているというのに。

收容所から帰って十五年近く、こいつと軍人としてもまともに口を利いた事はない。同じ聯隊に配属になってからも、話すことは最低限の事務的なことばかりだ。

「第57特別軍団は即座にこれを迎え撃ちます。現在敵の航空戦力は脅威ですが、地上戦力は貧弱です。そもそもわが赤軍の地上戦力の軍事的優位は1935年以降、我が戦力が敵の単純な兵員数のみでも三倍となり、火力比はさらに差をつけ、完全なものとなっています。適切な戦力集結を行えば敵戦力の駆逐はたやすいことです。」

若手の参謀がムツとした声色で言った。

「適切に行えればな。」

ドミトリーは挑発的に言った。この時点で軍の方針への批判ととられかねない。この場の誰一人そのようなことを言わない理由は、ドミトリーが聯隊政治委員という事実上最も高い権威を持つ者であるからである。

「タムスクまでの移動の所要時間は。」

僕はドミトリーの言葉を遮るように言った。

「はっ、途中バールンウルトにて補給を受けますので三日間で到着するかと。こちらが行動

計画書です。」

すでに策定された計画書に目を通す。移動計画、武器弾薬食料燃料の補充、人員、戦闘序列、速やかに且つ事細かに確認する。政治委員であるドミトリーにも渡す。特に確認することはないという小馬鹿にしたような表情でざっと目を通すと僕に書類をつき返してきた。その態度はいつものように不愉快だった。

その不満をこれまた常のごとく、つとめて顔に出さぬようにし、決済の署名をし、印を押す。

「結構。では聯隊長より命令。聯隊は行動を開始せよ。」

27日、前日にはタムスクに聯隊は遅れることなく集結した。

翌28日補給、兵員の休養等業務をこなしていると、ハルハ河西岸に敵進出との報告をうけた。すでに国境に進出した部隊と交戦状態に入ったようだ

越境してきた敵部隊はイヤポンスキイの歩兵数個大隊規模にマンジュウルスキイ（満州人）の騎兵が一中隊規模だ。恐らくは師団偵察だろう。国境警備のモンゴルリヤ人民軍を追い散らし、ハルハ河に敵は至った。どうやら敵のかねてから主張していた国境線で停止したようだ。

すでに国境付近に進出していた戦力集結を完了させていた我が軍は、戦車を中心に攻勢にでたようだ。完全に敵の虚をついたようだが、敵の抵抗も頑強のようである。戦略予備されていた我が第142車載狙撃聯隊にも進出命令がでた。交戦域はタムスクから目と鼻の先であるが、部隊間の無線連絡がうまくついていないらしい。どこに進出すべきか判断できない。独自に偵察分隊を無理矢理六分隊派遣したが、戦況は判然とせず、その損耗も無視できなくなってきた。

前線の詳細な状況も持つて来ず、ただ漠然と増援命令を繰り返すのみの連絡将校を何人も蹴り返し、正確な進出先の命令書を受けた時には、すでに夕刻であった。指定された交戦地域にわが聯隊が到着する頃には日没を過ぎた時間になってしまう。

とにかく命令には服従せねばならない。輸送車に可能なかぎりの高速を出させ、できるだけ早く戦域に到達しようとしたが、やはり日没には間に合わなかった。

夜間であったため、こちらの輸送車両の前照灯で補足され、敵陣地からおそらくは10センチ以上の口径の機関銃の射撃を受け、先頭車両を含む前方の車両数両が兵員もろとも撃破された。その炎の明かりを利用し敵は突撃を敢行してきた。前方に進出したT26戦車数両に敵兵が群がったらしい。対抗するために歩兵は到着し次第小隊長が各個に判断して応射しているようだ・

「これは、まずいですな。」

指揮車両に同乗していたドミトリーは口元をにやけさせながら、炎上する我が軍の車両に照らし出された前方の悲惨な状況を眺めていた。至近の地面には発砲音とほぼ同時に弾丸が跳ねている。敵の突撃力は想定以上、おそらく小銃の有効射程まで浸透していると見てよ

いだろう。明らかにロシア語ではない雄叫びが接近している。加えて奇襲によりわが聯隊は混乱中だ。

小銃弾程度なら防ぎ得る装甲が施された指揮車を盾にするように停めさせ、その陰に直属の司令部要員と運転手と護衛、そしてドミトリーとともに降車した。状況判断が必要だ。今とるべき行動はただ一つだった。

「一旦、態勢を立て直す。撤退するぞ。おいお前たち、機関銃中隊各隊に伝令。『機関銃中隊各隊は前進後散開、敵陣地に向け制圧射撃、並びに前衛への支援射撃、前衛部隊撤退を支援、過半の友軍の撤退を確認後後退せよ。弾薬は半数までの消耗を可とする。』だ。」

同乗していた司令部の下士官数名を後方にいる機関銃中隊に伝令にはしらせろ。」

また、僕たちと同じく停車し、装甲車を盾に応戦していた隣の車両の司令部直属小隊を分散して全隊に撤退を告げる伝令に走らせた。彼らのうちどれほどがその役目を果たすかは賭けだが、無線が信用できない以上これしかない。無論雑音しか発しない無線にも、一応同様の命令を流す。

指揮車両には運転手と護衛の兵士二名を除き僕とドミトリーだけになった。

「敵前逃亡ですか。」

ドミトリーは他人事のように言った。こいつはそれをさせないためにいる。

「このまま混戦に付き合っても無意味だ。統制を取り戻し明日払暁に再度攻撃する。」  
今ここでこいつを殺すか。乱戦で戦死したことにできる。

腰の拳銃にそっと手が伸びた。

敵は土嚢や塹壕による即席陣地を構築しているらしい。炎の明かりで照らされた敵情をよく観察しながら撤退しきれるか頭を巡らせた。

後方から六台機関銃中隊の車両が進出してきた。即座に展開し敵陣地に向けて制圧射撃を始める。

彼らの弾薬が半分に減るまでに前方から後退がなければ、前衛は見殺しにするしかないさそうだ。

「砲兵中隊に支援させつつ、聯隊主力を突撃させてはいかがです。兵員火力いずれも我らが勝っている。」

「前衛の味方ごと砲撃しろともいうのか。」

そうドミトリーの軽率な発言を批難している僕自身、浸透している敵もろとも味方の前衛に機銃で射撃を加えさせている。それでも砲撃で吹き飛ばすよりはましなのだ。ドミトリーの発言はいたずらに味方の損害を増やそうとしているようにしか見えない。

指揮官の状況判断を妨害し、自軍の損害をいたずらに増やそうとする。世界大戦以来の苛烈な戦闘下で僕は確信した。

こいつは軍を裏切った。

今一度腰の拳銃にそつと手を伸ばす。

拳銃囊の留め金をそつと外し、遊底を静かに引き、撃鉄は上がったままにしておく。

前方では、敵の追撃が始まっている。

敵は機械化歩兵ではない、すでに至近まで迫った敵が車両に乗り切れなかった味方の兵士に銃剣を突き立て、逃走するわが軍の車両に銃撃を加えているが、機械化歩兵であるわれわれの撤退速度に追従できない。くわえて、遭遇劈頭に先頭車両を破壊した機関銃が敵の最大火力のようだ。砲を持っていない以上偵察目的の部隊とみなした当初の判断は正しいのだろう。手榴弾程度は所持している可能性はあるが、砲撃による損害のおそれは考慮から外してよい。敵兵の脅威はその兵士各個の驚くべき練度と戦意のみだ。

独特なエンジン音とともに、兵員輸送車が後退してきた。

「運転手乗車しろ。我々も撤退するぞ。お前たちもだ。」

本来指揮官より先に護衛が乗車することはない。だが、命令されたこと、なにより司令部に直属の兵士だけあって、運転手も彼らは優秀だった。乗車すると、こちらに背を向け、目前まで迫っていた敵にそれぞれ拳銃と小銃で牽制射撃を加えだした。

「同志聯隊長、早くお乗りください。」

いかにも古参兵という風体の兵士の一人が敵を一人射殺しつつ背を向けたまま言った。

「わかった。」

「同志政治委員、乗れ。」

先にドミトリイに乗車するようながす。疑いもなくこちらに背を向ける。味方でこちらを見ているものはいない。銃声と怒号とエンジン音が周囲から音を消した。

後頭部に一つ、心臓の一つ。

ドミトリイだったものは崩れ落ちた。

即座に拳銃を敵に向けて構え弾倉が尽きるまで射撃する。

「政治委員がやられた。」

白々しく叫ぶ。

「出せ、主力に合流しろ。」

車両の装甲に敵弾がリズムを奏でている。

完全に引き離してから、各大隊と聯隊直卒の砲、及び機関銃中隊に対し、半数に休養を取らせつつ、交代で警戒態勢を維持させる。無論、各車両を散開させることも付け加える。ガソリンエンジンの我が軍の車両は、密集は自殺行為だ。

日の出までの数時間が永遠化と思われた。

翌朝、今一度敵情を観察した。どうやら我が聯隊が昨晚遭遇した敵は二個中隊規模で、かなり突出しているようだ。我々が撤退した後、夜陰に乗り撤退されるかとも考えたが、先行したわが軍により敵主力から分断されているらしい。

ついにドミトリイを殺したことを思い出し喜悅の笑みが浮かんだ。だが、復讐に燃える兵士たちにとって、単にそれは意気軒昂な指揮官にしか見えないはずだ。

「昨晚の敵討ちだ。」  
笑みを浮かべたまま聯隊参謀たちに作戦を指示する。

僕の笑みは、目論見通りに誤解されたく。将兵皆、やってやろう、と士気の高さを表す健全な笑みを浮かべて任務に励んでくれた。

奇を衒う必要はない。聯隊砲兵に支援砲撃を加えさせ、化学戦車（火炎放射戦車）を中心に歩兵を随伴させつつ陣地を攻撃した。

敵が防壁代わりにしていた一台だけの装甲車両を聯隊砲兵の砲撃が撃破し、化学戦車がその射程まで敵陣地に前進に成功すると、僕は勝利を確信した。

火炎放射に耐え兼ね陣地を放棄した敵は、突撃を敢行してきた。やはり恐るべき戦意である。しかし歩兵数のみでも我々が圧倒している。一部で突破を許し、数個分隊規模の死傷者を出したが、数分もせずに敵の殲滅に成功した。

「みごとな指揮でした同志聯隊長。」  
作戦参謀の一人が言った。

「ああ、残敵に注意せねばな。」  
自分でも驚くほどの朗らかな声色だ。

この二日間の戦闘でわが軍は国境線の確保という目標を達成したものの、多大な損害を被った。

僕は今後の情報収集のために、壊滅した敵陣地を搜索し、文書の類を探したが、さすがに敵もまともな軍人らしく、そのような情報を示すものは何一つ残っていないかった。兵士の死体一つ一つを裸に剥いて調べさせ、終われば服をきせ安置するという作業を部下に課すと、は若い小隊長の一人が

「帝国主義者の死体に気を使うのですか。」  
と聞いてきた。

「少なくとも兵士として兵士の敬意を表すべきだ。」  
「馬鹿けた質問をしました。」

本来なら、彼らはいくまで帝国主義的ブルジョア政府の犠牲者だ、とか敬意を受けるに足る行動によって、わがソヴェエトの威信が高まる、といった気の利いた一言をつけるべきだったのだろうが、ここには兵士しかいないのだ。この若い小隊長も納得したようだ。

ドミトリイの戦死を受けて、各大隊以下の政治委員たちは、こちらを恐る恐る覗うそぶりがあるだけだ。

「かまわん。昨晩負傷した友軍の兵士が生きているかもしれない、そちらもよく注意せよ。」  
生来の小心が鎌首をもたげた。ドミトリイの死体を確認すべきだろう。

不安は杞憂に終わった。後頭部からの貫通弾で顔面が半分吹き飛んでいたが、政治委員の腕章をつけたドミトリイの死体が発見されたと報告を受けた。死体を確認した。ステップの味気ない草原に奴の頭蓋は花をさかせていた。

二十年來の宿願を果たしたため、心理的には晴れやかだった。  
だが公人として、軍人としての仕事はまだ残っている。

戦闘が昨晩と今日の午前だけで終わるはずがない。あれは間違いなく、師団規模の部隊が派遣した搜索聯隊の一部隊であり、軍団全体で敵を押し返したとはいえ、敵軍がマンジュウルリヤに展開している兵力を考えても戦略予備を投入してくるであろうことは、容易に予測できる。

いかに我が極東軍との地上戦力差が大きいといえど、航空戦力と兵士の練度はわが軍にまさる。おそらくは交代が来るまで、一帯の保持の必要があるだろう。陣地構築資材、食料、弾薬、医薬品の補給要請をタムスクに、兵の補充要請をウランバートルに出す必要がある。

野戦司令部とした指揮車内で補給要請に必要な書類を書き上げ、まったく信用ならない無線通信とともに書類をタムスクとウランバートルに送った。

指揮官としての義務をはたし、兵士の作業監督の名目で聯隊参謀数人と草原の地平と碧空をぼんやりと眺めつつタバコをふかしていると、軍団司令部から伝令が来た。

「撤退だ」と。

まだ少年の面影ののこる連絡将校をにらみつけてしまった。

怯えた彼が再度軍団司令部からの命令を震えた声で復唱するのを手を振ってとめた。彼に八つ当たりしても何の意味もない。

「同志軍団司令官は何をお考えなのか、敵に再侵攻の余力があることは明らかではないか。」  
事実、報告によるとわが聯隊が殲滅した部隊以外の敵は国境から下がっただけなのだ。

「敵増援が来た場合、わが軍団が危険であるとのことです。」  
連絡将校は言った。馬鹿な、ならばなおさらここを保持すべきであるし、増援を受けるべきではないか。

「他の部隊の損耗はさらに激しいようですな。しかし…。」  
聯隊参謀の一人が言葉を濁した。分かっている。それ以上の軍団上層部批判を一尉官ごときができるものではない。

「同志軍団長に意見具申をして来る。」  
僕は連絡将校の車に便乗し軍団司令部に乗りこんだ。

具申は受け入れられなかった。軍団司令は敵の大規模逆襲の恐れあり、と壊れた蓄音機のように繰り返すばかりであった。だからこそ陣地構築が必要だ、と言う僕の意見に耳を貸すものは、軍団首脳にいなかった。

勝てる戦闘を、戦略的に圧倒できる戦争を無駄にしたことを口惜しく思いながらも、命令に服従せねばならない。

補充と休養のため、聯隊はウランバートルの聯隊駐屯地に戻った。

麾下部隊の戦闘詳報、戦闘行動記録を確認し、軍団への報告書を書き上げた。ここに聯隊政治委員が戦死したと付記することで、軍団長と軍団政治委員、そして彼らとつながっているだろうあの NPKD の男は僕が彼らの要求にこたえたことを理解するだろう。

その後聯隊の再編計画を立て聯隊参謀にこまごまと指示を出すと、すでに半日たっていた。

官舎に戻る将校専用車のスプリングの悪さに尻を小突かれながら、ドミトリイのことを考えていた。あいつは本当に反革命分子だったのだろうか。

戦闘中の言動は僕の聯隊に損耗を強いているように感じた。だが、政治委員ならば戦闘中にいうことはあれしかない。

僕はドミトリイを私的な憎悪のままに射殺しただけかもしれない。

いや、帝国の将校となったころ、あいつに拳の一つも食らわせられなかった僕は、公人としての大義名分を得てやっと一撃を食らわせることができたのだ。そこでの公とは何であるかは問わない、ただ自分より強大な権威の後押しが必要だったのだ。

僕の性根は弱虫アレクセイのままだ。もし大義名分がなければ、ドミトリイをどれほど憎んでも何もしなかっただろう。

四年前から吹き荒れる肅清の嵐はその実、首都で書記長に権力を集約させてゆく作業に過ぎないことは、だれも口にしないが、だれもが知っていた。彼が集権体制が確立したのちに生き残っているかは、隠れるものもない雪原でブルガ（吹雪）に見舞われ、首をすくめ、過ぎ去る前に凍死するかしないかを考えるようなものだった。体力が吹雪に耐え得れば、生き残る。革命からも生き延びたように。

ドミトリイを殺したこともあるいは共産主義国家の公人としてすらも全くの無駄なことだったのかもしれない。

ゴツリと車が跳ねる。

モンゴルリヤの平原の中に異物として屹立するわが軍団の駐屯地は草原の砂塵で紅に染まった夕日に赤く濡れていた。

孤独な休日をご過ごした。官舎の自室で新聞を読みながらタバコをふかしていた。



前の配給で蓄えていたタバコの最後のひと箱を吸い尽くしたことに気が付いた。次の配給まで待たねばならない。

ゾーヤと娘たちの住む官舎を訪ねねばならなかった。聯隊で高級将校が戦死した場合、政治委員であつてもその家族への戦死報告は聯隊長の職務だ。書面でもよいが、僕を捨てた女と子供がドミトリイの死にどんな反応を示すか、嗜虐的な興味がわいた。ドミトリイを殺したことで彼女と娘たちへの未練も霧散したようだ。あとは彼女たちが悲哀にまみれるさまをせいぜい見物してやろうと思つた。

ドミトリイの戦死に関する書面を書き上げた。黨員としての彼の家族の処遇や残務処理は党の仕事だ。極東支部が行うだろう。

ドミトリイの家を訪ねた。家族持ちの軍人官舎は想像以上に質素なものだった。二十代半ばくらいの方が出てきた。かつて僕の娘だった、随分と育つたものだ。

「お母さま、お客さんよ。」  
女は言つた。

ゾーヤが出てきた。かつての美しい面影はどこへやら、醜く太り、顔にはしわが刻まれていた。二十年越しにまともに顔を合わせる。どんな表情を見せてくれるのだろう。見捨てたかつての夫がいきなり訪ねてきたのだ。

「あら、聯隊長閣下。」  
まるで他人にあつたかのように言つた。村にいたころの純朴な娘のままの声で。

「いつも夫からお話を伺っています。とても立派な方だと。」  
拍子抜けしていると、中に勧められた。なんだこれは。ゾーヤは僕を見て何も思わないのか。

「お茶です。」

女がジャムをたつぷりと入れた紅茶を持って来た。

「どうぞごゆっくり、聯隊長閣下。」

朗らかな笑みを浮かべ女は下がつた。

「あらあら、ごめんなさいね。口の利き方も知らない娘で、もう二十五にもなるのだから、どこかにお嫁にやらないといけないのに。下の娘のほうが先にお嫁に行つてしまつて、夫が次帰つてくるときは、若い軍人さんを紹介すると張り切つてまして。」

まるで平穩な家庭そのものといったその雰囲気には僕はなんと切り出して良いかわからなくなつた。

「本当の娘ではないのに、夫は娘を本当にかわいがつていらっしゃるんです。前の夫は革命のところ、いえ、二十年ほど前に生き別れてしまひまして……。夫は前の夫に負い目を感じていたようで、前の夫と分かれなくてはいけなくなつた時からずっと私たち親子の面相を見てくれているのです。」

眩暈がした。

僕がその本当の夫で、本当の父親であるはずなのに、まるでこの光景は、僕とゾーヤとの結婚などなくて、ゾーヤは誰か別の男と娘たちをもうけ、その夫と死別し、ドミトリイと再婚したかのような感じだ。

「前の夫はアレクセイ・ヴォルコフというのです。聯隊長閣下と一字ちがいでですね。もつとも前の夫は聯隊長閣下のような軍人然とされたお顔ではなく、もつと優男でしたけど。」

ゾーヤは部屋の間を見つめた。つられて視線を巡らすと、戸棚の上に二つの写真があった。一つはドミトリイとゾーヤと娘たちが移った新しい写真。

もう一つはセピア色の写真。

そこには若いころのゾーヤと、帝政時代の軍服を着た僕が、それぞれまだ赤ん坊と幼子の娘たちを抱いて写っていた。

紅茶の水面に写った僕の顔を見た。収容所時代と赤軍の局地戦訓練でついた凍傷と雪焼けで歪み爛れた悪魔のような顔があった。茶器の取っ手をもつ指は二本足りない。

「プロホロフ聯隊政治委員は先の戦場で戦死しました。」

意を決するしかなかった。きわめて事務的に戦死通告と遺族補償に関する書類の入った封筒を渡し、その説明をした。

ゾーヤは目を伏せた。ショックで固まっているようだ。

嗚咽がしばらく続いた。いたたまれなくなって目をそらすと、台所の方からも若い泣き声が聞こえた。妄想した嗜虐的喜悦など微塵も感じなかった。

「そうですか。軍人ですものね。」

涙をたたえながらゾーヤは顔を上げた。

彼女は涙を袖で拭いながら立ち上り、奥の方に向かった。

「聯隊長閣下こちらに。」

促されるままに、別の部屋に通された。

「夫の書斎です。」

鍵束を一つ下の抽斗から取り出し、鍵のかかった抽斗をあけると、蟻で嚴重に封された封筒が出てきた。

「夫が自分にもしものことがあったら、聯隊長閣下に渡せと言っておりました。」  
僕はゾーヤを名前で呼ぶこともできず、彼女の家を辞した。

魂が抜けたような足取りで、表に待たせていた将校専用車に乗り込んだ。

封を切ったが、運転手しかいないのに、中身を取り出すことができなかった。

官舎の自室に帰り、机の上に中身の入ったままの封筒を置き茫然としていた。

背なの窓からの赤い西日の影法師がのびきり、駐屯地の明かりが薄く自室に差し込むまですそうしていた。

無性に煙草が吸いたかった。マッチと煙草入れを取り出し、もう吸い尽くしたことを思い出した。

『アレクセイへ』

この手紙を君が呼んでいるということは、私はもうこの世にいないだろう。死因は何だろうか。もし政治絡みであったなら、君の立場が危ないだろうから、読んだらすぐに燃やしてほしい。

君はおそらく私を恨んでいると思う。けど少しだけ私に謝罪と釈明の機会をくれないか。私は幼いころから君に嫌な思いばかりさせていた。

けれど、分別が付くようになって、罪悪感が大きくなっていった。勝手な物言いだとは理解している。けれど本当だ。

革命が起きてゾーヤから君が処刑されると聞き私は何もたつていもいらなかった。私は刑務所時代に党の幹部の一部や実務屋に便宜を図るなどいくつか恩を売ったことで彼らに顔が利くようになり、まさか本当に革命など起こるなどと思っていなかった。稼ぎのよさそうな盗賊に入るような気持ちで入党してそこそこの人間を動かせるようになっていたのだが、そのつてを使って、賄賂と脅迫で止めた。

こんな方法だと誇り高い君は怒るだろう。怒ってくれ、私は無力で結局そのあとの君の収容所送りを止めることはできなかった。

だからせめて君の残したゾーヤと娘たちは守ろうと思った。ゾーヤに黙って公的には革命前に君と離婚していることにした。そして私の家族として守ることにしたんだ。ゾーヤにもなんとか言い含めて、(愛した人はただ一人だと彼女は何度も私の前で泣いたよ。)表向き私の妻になってもらった。けれども誓ってゾーヤには穢れたことをしていない。娘たちも立派に健康に育てることができたと思う。

黨員として地位を固め、赤軍の政治委員の末端として日々を送っていると、配属先の同じ部隊に君とそっくりの名前があった。調べてみると表記の間違いで、凍傷でかなり顔は変わっていたけれど間違いなく君だった。だがゾーヤには告げられなかった。政治委員である以上将校と過度に接触するものは家族ごと粛清のおそれがあったからだ。けれど、それでもこのことは君にもゾーヤにも嘘をついてだましていることだった。本当に済まない。せめて彼女と娘たちが健康でいることを官舎の近くで確認してもらおうことが精一杯だった。

私が死んだ今、今度は君がゾーヤを守るといふ本来の役目を担ってくれ。いや、私が不当に割り込んでしまった本来の君のすべきことをしてくれ。特に私が政治絡みで死んだのであれば彼女たちの立場はとても危険になる。

灰皿にドミトリーの手紙を入れ火をつけた。暗い部屋でその灯火は一瞬部屋全体を明るく照らし消え失せた。

ドアがノックされた。誰何すると、僕の副官だった。自室に招き入れた。

「同志少佐、至急聯隊本部へおいで下さい。」  
ウオトカを腹いっぱい飲んだかのように上気し紅潮した彼は、汗をだらだらと垂らしていた。荒い息を整えることのできていない彼に

「良き兵士は常に駆け足だな。」  
ねぎらいにもならぬ頓珍漢な言葉を投げかけ、ただ事ではなさそうだと、そそくさと軍装を整え、聯隊本部へ向かった。半生を費やした憎悪があまりにも愚かであった男はまたしても公人の立場に逃げ込んだ。

聯隊本部の作戦室では幕僚、各隊指揮官が集合していた。戦死したドミトリーの以外の各部隊の政治委員がいない。異様な光景だった。

皆ずがるような目つきだ。  
「何があった。」

報告を聞こうとすると、全幕僚の最も上席に見慣れぬ将校が立っていた。その後ろには聯隊規模の軍集団に配置すべき人数ちよほどの見慣れぬ顔の政治委員が整列していた。

なんのためらいもなく最上位に立つ将校は、金髪碧眼の、いかにもウラル以西より来たという雰囲気のある青年だ。階級はスターシユイ・カピタン（上級大尉）。伊達男は一歩前に出て敬礼した。

「同志聯隊長。」  
敬礼に答礼する。

「何か同志上級大尉。」

将校の胸にはいくつかモスクワの親衛隊に所属しないと獲得できない徽章が輝いていた。  
「新たに着任しました同志軍団司令官からの命令書です。本時刻をもって同志少佐の指揮下に入ります。また同時に新たな政治委員が聯隊本部および麾下部隊に配属します。」

それだけ告げ、完璧な所作で書簡を僕に受け渡すと、彼は下がった。第57特別軍団の上層部は更迭された。新たにベラルーシから司令官が赴任し、前の軍団司令部に一人ひとり自己批判させ、スパイにも匹敵する行為だと罵り、各自の左遷先を告げたらしい。

僕はといえば、命令に従ったのみであること、現状保持の意見具申を行い、そのため補給要請という明確な証拠がバーンウルトの集積地に書面として残っていたことにより、（僕の意見具申の事実が軍団司令部の報告書で握りつぶされていた。）ジューコフ新司令官に評価された。直属の上官である師団長も留任した。

だが、第57特別軍団麾下の部隊で先任の軍団司令官の消極策に同調したものは将校、政治委員問わず、罷免されたいらしい。政治委員は特に、極東における内務人民委員の失点により、赤軍に天秤が傾いたことから、それを取り戻すため、かなりの人数が家族ごと粛清されたようだ。ドミトリーへの粛清命令も両組織の権力闘争の一端だったのかもしれない。ゾーヤたちは含まれていない。彼女たちは華々しく戦死した革命英雄の遺族だ。結果として僕は彼女たちを守り得たことになるのだろうか。それは永遠にわからない。

新司令官は積極策をとるようだ。西方軍や親衛隊から一線級将校を引き抜き、駐モンゴルリヤの赤軍を鍛えなおし、マンジュウルリヤとそこに控えるイヤポンスキイをたたくようだ。失点なしとみなされた僕にも目付け役として子飼いを送り込んでくる念の入りようだ。「党中央肝いりです。」

轟音とともに駆ける兵員輸送車両の列が一樣に急停止し、兵員が即座に降車し戦闘態勢をとる。新司令官の命令通り、僕は聯隊に猛訓練を課した。

それを将校幕舎から監督していると、いつの間にか背後にいた上級大尉がぼそりと告げた。

本来軍規では欠礼を咎めるところだか、そんな馬鹿々々しいことはしなかった。

なによりたとえ、軍規を叫ぶしか能のない将校でもその名を聞けばそんなことはしないだろう。今回の顛末についての概要を聞かされ、

「同志軍団司令は同志少佐とその聯隊に期待しておられます。」

と、次はさらなる激戦区に投入するぞとほめかされた。

「そうか。本職は任務に精励するのみだ。」

模範解答がこれしか浮かばなかった。僕がモンゴルリヤの赤い夕陽に影だけ残す日も近そうだ。ドミトリーの頼みを果たすことは難しいかもしれない。

第57特別軍団に動員が発令されたのはその半月後だった。